

【 復活のトロパリ 第4調 】



しゅのおんなでしはふくかつのひかるおと
主女弟子復活の光音
づれをてんしよりききうけて、
天使聞き受
げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒
原祖の定罪を振棄し徒
にほこりていえり、しはほろぼさに
誇日死滅
れ、ハリストカミはふくかつして、せかいに
神復活せ世界
おおいなるあわれみをたまえり。
大憐賜

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座なるもの、忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智なるハリストスのえきしゃ、聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
神撰笛愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器光
しようしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照者亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群た爲お及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
全世界た爲生ち命賜うせ聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給え。

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
光栄父子と聖いしんにき
す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾は初我國お於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの
外來者知れども、ハリストの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖かきながし、爾敵

きをぞくしんの子となし、かれらにか
屬神子となし、かれらにか

みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第4調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 わがきゅうせいしゅおよびしょくざいしゅはかみと
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神
 して、ちにうまれしものをかせより
 地 生 者 桎 梏
 ときて、はかよりふくかつせしめ、
 釋 墓 復 活
 ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして
 地 獄 門 破 主 宰
 みっかめにふくかつしたまえり。
 三 日 目 復 活 給

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃^{さんえい}榮^{ことごと}せられ、^{てんぐん} 悉^{ふくはい} くの天^{ばんぶつ} 軍^むより伏^{ゆう} 拜^{ゆう}せられ、萬物を無より有
 となし、人^{ひと}を爾^{なんぢ}の像^{ぞう}と肖^{しょう}とに依りて造り、爾^よが諸^{つく}の賜^{なんぢ}を以て之^{もろもろ}を飾^{たまもの}
 り、願^{ねが}う者^{もの}に智慧^{ちえ}と明悟^{めいご}とを與^{あた}え、罪^{つみ}を行^{おこな}う者^{もの}を棄^すてずして、其^{その}救^{すくい}の爲^{ため}に
 痛悔^{つうかい}を立て、我^た等^{われ}卑^{らい}しくして不^ふ當^{とう}なる爾^{なんぢ}の諸^{しょ}僕^{ぼく}を、此^この時^{とき}に於^{おい}ても、爾^{なんぢ}が
 聖^{せい}なる祭壇^{さいだん}の光榮^{こうえい}の前^{まえ}に立^たちて、爾^{なんぢ}に當^{とう}然^{ぜん}の伏^{ふくはい}拜^{さんえい}讃^{たてまつ}榮^たを奉^たるに堪^たうる
 者^{もの}となしし主^{しゅ}宰^{さい}よ、爾^{なんぢ}親^{みづか}ら我^{われ}等^ら罪^{ざい}人^{にん}の口^{くち}よりも聖^{せい}三^{さん}の歌^{うた}を受け、爾^{なんぢ}の
 仁慈^{じんじ}を以^{もつ}て我^{われ}等^らに臨^{のぞ}み、我^{われ}等^らに凡^{およ}そ自^じ由^{ゆう}と自^じ由^{ゆう}ならざる罪^{つみ}を赦^{ゆる}し、我^わが靈^{たましい}
 と體^{からだ}とを聖^{せい}にし、我^{われ}等^らに生^{しょう}涯^{がい}善^{ぜん}功^{こう}を以^{もつ}て爾^{なんぢ}に務^{つと}むるを得^えせしめ給^{たま}え、聖^{せい}
 なる生^{しょう}神^{しん}女^{ぢよ}と古^こ世^{せい}より爾^{なんぢ}の喜^{よろこび}を爲^なしし諸^{しょ}聖^{せい}人^{じん}との祈^き禱^{とう}に依^よりてなり、)

司祭) 蓋^{けだしわ}我^{かみ}が神^{なんぢ}よ、爾^{せい}は聖^{せい}なり、我^{われ}等^ら光榮^{こうえい}を爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に献^{けん}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よ世^よ
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅



せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神
に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世
せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐
れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇
き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
毅 聖 常 生 者 我 等 を
あ わ れ め よ 。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、第四の調、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、



し ゅ よ 、 な ん ぢ の し わ ざ は な ん ぞ お お き 、
主 爾 工 業 何 大



誦經) わが^{たましい}靈よ、主^{しゅ}を讃め揚げよ、主^{しゅ}わが^{かみ}神よ、爾^{なんぢ}は至^{いた}りて大^{おお}なり、



誦經) しゅ^{なんぢ}よ、爾^{しわざ}の工業は何ぞ多^{おほ}き、



【 アポストロス 使徒經 103 端 ロマ書 10 章 1～10 節 】

司祭) えいち 睿智、

誦經) せいしと 聖使徒パヴェルがロマ人^{じん}に達^{たつ}する書^{しょ}の讀^{よみ}、

司祭) つつし 謹^きみて聽くべし、

誦經) けいてい 兄^わ弟よ、我がイスライリの爲^{ため}に 心^{こころ}に願^{ねが}う 所^{ところ}と神^{かみ}に禱^{いの}る 所^{ところ}とは、其^{その}救^{すくい}を得^うるに在^あ

り。蓋^{けだし}我^{われ}彼等^{かれら}の爲^{ため}に 證^{しょう}を作^なす、彼等^{かれら}は神^{かみ}に於^おける熱^{ねつ}心^{しん}あり、然^{しか}れども知^ち識^{しき}に循^{したが}うに

あらず。蓋^{けだし}彼等^{かれら}は神^{かみ}の義^ぎを識^しらず、己^{おのれ}の義^ぎを立てんことを圖^{はか}りて、神^{かみ}の義^ぎに服^{ふく}せざりき。

蓋^{けだし}律^{りつ}法^{ぽう}の終^{おわり}はハリストスなり、凡^{およそ}の信^{しん}ずる者^{もの}義^ぎとせらるるを致^{いた}す。モイセイは律^{りつ}法^{ぽう}に

よ^よぎ^ぎさ^さし^しる^るこれ^{これ}おこ^{おこ}な^なひと^{ひと}これ^{これ}よ^よい^いしか^{しか}し^しん^んよ^よぎ^ぎか^か

い^いわ^わなん^{なん}ぢ^ぢこ^ころ^ろい^いな^なか^かた^たれ^れて^てん^んの^のぼ^ぼす^すな^なわ^わち^ちく^くだ^だた^ため^めあ^ある^るい^い

た^たれ^れふ^ふち^ちく^くだ^だす^すな^なわ^わち^ちし^しの^のぼ^ぼた^ため^めしか^{しか}し^しょ^ょな^なに^にい^いこ^こと^とば^ば

なん^{なん}ぢ^ぢち^ちか^かなん^{なん}ぢ^ぢく^くち^ちあ^あなん^{なん}ぢ^ぢこ^ころ^ろあ^あこ^こす^すな^なわ^わち^ちし^しん^んこ^こと^とば^ばわ^われ^れら^らつ^つた^たと^ところ^{ころ}

の^{もの}者^{もの}なり。蓋^{けだし}若^{なんぢ}し 爾^{くち}の口^{しゅ}に主^うイ^とイス^{なんぢ}スを承^{こころ}け認^{かみ}め、爾^{かれ}の心^しに神^{ふく}が彼^{かつ}を死^くより復^く活^くせ

しめ^{しん}し^すこ^すと^すを^す信^くぜ^くば、則^く 救^くわれ^くん。蓋^く 人^く心^くを^く以^くて^く信^くじ^くて^く義^くと^くせ^くら^くる^くを^く致^くし、口^くを

もつ う みと すく いた
以て承け認めて救われるを致す。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾 に平 安、

誦經) なんぢ しん
爾 の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい
神よ、 爾 の寶座は世世に在り、 爾 の國の權柄は正 直 の權柄なり、



誦經) なんぢ ぎ あい ふほう にく
爾 は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅさい} 宰^わよ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知る智慧^しの 淨^{ちえ}き光^{いきぎよ}を輝^{ひかり}かし、我^わが思^し

念^{ねん}の目^めを啓^{ひら}きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく}音^{いん}の 教^{おしえ}を悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我^わが衷^{うち}に 爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる 誠^{いましめ}

を畏^{おそ}る 畏^{おそれ}をも入^いれて、我^{われ}等^らが 悉^{ことごと}く の 肉^{にく}體^{たい}の 慾^{よく}を踏^ふみ、凡^{およ}そ 爾^{なんぢ}の 喜^{よろこ}ぶ

所^{ところ}を思^{おも}い且^かつ 行^{おこな}いて、屬^{ぞく}神^{しん}の生^{せい}活^{かつ}を過^すぐるを致^{いた}させ給^{たま}え、蓋^{けだし} ハリス^{かみ}トス神

よ、 爾^{なんぢ}は我^わが 靈^{たましい}と 體^{からだ}との光^{こう} 照^{しょう}なり、我^{われ}等^ら 爾^{なんぢ}と 爾^{なんぢ}の無^む原^{げん}の父^{ちち}と至^し聖^{せい}至

善^{ぜん}にして生^{いのち}命^{ほどこ}を 施^{なんぢ}す 爾^{しん}の神^{こうえい}とに光^{けん} 榮^いを獻^{いつ}ず、今^よも何^い時^まも世^よ世^よに、ア^あミ^ん。)

【 エヴァンゲリオン 福音 經 マトフェイ福音書 28 端 8 章 28～9 章 1 節 】

司祭) 睿^{えいち}智^{つし}、肅^たみて立^{せい}て聖^{ふく}福^{いん}音^{けい} 經^きを聴^{しゅう}くべし、衆^{じん} 人^{へい}に平^{あん}安^ん、



司祭) マトフェイ^{でん}傳^{せい}の聖^{ふく}福^{いん}音^{けい} 經^{よみ}の讀^よ、



司祭) 謹^{つし}みて聴^きくべし、彼^かの時^{とき} イス^ちス、ゲルゲシ^{いた}ンの地^{とき}に至^まりし時^よ、魔^ま鬼^きに憑^よらるる者^{もの}二^に人^ん 墓^{はか}

より出^いでて、彼^{かれ}を迎^{むか}う、甚^{はな} 猛^{はだ}し、人^{ひと}の敢^あて其^{その} 路^{みち}を過^すぐるなきに至^{いた}れり。視^みよ、彼^{かれ}等^ら 號^{さけ}

びて曰^いえり、神^{かみ}の子^こ イス^{われ}スよ、我^{なん}等^ぢと 爾^{なん}と何^あぞ 與^あらん、時^{とき} 未^{いま}だ至^{いた}らざる先^{さき}に、 爾^{なん}

我^{われ}等^らを 苦^{くる}めん爲^{ため}に此^{ここ}に來^{きた}りしか。此^{ここ}より 遙^{はるか}に 豕^{ぶた}の 大^{おお}なる群^{むれ}は牧^かわれたり。魔^ま鬼^き 彼^{かれ}

に求^{もと}めて曰^いえり、若^もし我^{われ}等^らを逐^おい出^{いだ}さば、豕^{ぶた}の群^{むれ}に入^いるを容^{ゆる}せ。彼^{かれ}は之^{これ}に謂^いえり、往^ゆけ、

まきい ぶた むれ い み ぶた むれことごと がけ うみ か みづ おぼ
魔鬼出でて 豕の群に入りしに、視よ、豕の群 悉く 山坡より 海に逸けて、水に溺れたり。

か ものはし まち い これら こと まき よ もの こと つ み まちこぞ
牧う者 奔りて 邑に入り、此等の事と魔鬼に憑らるる者の事とを告げたるに、視よ、邑 擧り

い むか かれ み そのさかい はな こ かれふね のぼ わた
て出でて、イエスを迎え、彼を見て、其 境 を離れんことを請えり。彼 舟に登り、濟り

おのれ まち きた
て 己の邑に來れり。

(比較用 口語訳) イエスはガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。さて、そこからはるか離れた所に、おびただしい豚の群れが飼ってあった。悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ へ